

「形式ほめ」の条件について

—シナリオ談話における先行要素の調査から—

大 野 敬 代

1. はじめに

「ほめ」⁽¹⁾ たい, という意図を実現させるために, 現代日本語では待遇関係に応じたさまざまな方法や表現を使い分ける傾向がある⁽²⁾ (大野 2002a, 2002b, 2003a)。

ただし, この「ほめ」の意図には, 純粹に, 相手に対する肯定評価の伝達を行おうとするものの他に, 「ほめ」の効果に重点を置き, その効果を期待して行おうとするものもある。ここで, 前者のように肯定評価に重点がおかれるものを「実質ほめ」(以下「実質」)とし, 後者のように効果の期待に重点がおかれるものを「形式ほめ」(以下「形式」)と呼ぶことにするが, 両者は連続していて明確な区別は難しい。しかしながら, 日常の言語生活においては, たとえ「形式」であっても相手に「形式」と理解されないように, すなわち「形式」は少しでも「実質」らしく, 「実質」はより「実質」らしく, 表現する工夫が行われると考えられる。

そこで小稿では, 大野 2003b に続き, 相手への肯定評価や好意をより確実に伝達し, 「ほめ」たいという意図を叶えるための一提案を行うべく, 逆に, どのような「ほめ」が「形式」としての印象を与えやすいのかを考察する⁽³⁾。大野 2003b では, 待遇関係をはじめとする外的条件に加え, 「ほめ」の内容, 方法, さらに談話レベルでの特徴を考察するべく「ほめ」に続く流れ(後続要素)の調査等を行った。小稿では, 後続要素の分析に対し, 「ほめ」の直前にある流れを調査するため, 先行要素について分析し, 「実質」との比較から, その性質を明らかにしたい。

2. 調査方法

2.1. 用語

小稿で用いる用語は以下の通りである。

「隣接ペア」	「ほめ」ことばとその応答のことば
「表現主体」	「ほめ」の送り手
「相手」	「ほめ」の受け手
「先行要素」	隣接ペア直前にある要素。直後のものは「後続要素」
「プラス機能」	談話において人間関係の円滑化や談話促進に好影響を与える機能
「マイナス機能」	談話において人間関係の円滑化や談話促進に悪影響を与える機能

「プラス要素」 プラス機能を持つ要素

「マイナス要素」 マイナス機能を持つ要素

「ポジティブな話題（・ポジティブな状況）」

表現主体、相手、又は両者にとって好ましい、ポジティブな話題や状況

「ネガティブな話題（・ネガティブな状況）」

表現主体、相手、又は両者にとって好ましくない、ネガティブな話題や状況

2.2. 方法

まず、資料のシナリオ⁽⁴⁾より、「ほめ」の談話をシーンごとに抽出する。次に、「ほめ」を「実質」、「形式」の各グループに分類する⁽⁵⁾。「実質」、「形式」、それぞれのグループにおいて、「ほめ」直前にどのような流れがあるのか調査するため、隣接ペアの前にある先行要素について、帰納的に分析する。

3. 調査結果

3.1. 直前の先行要素

先行要素が確認できたものは「形式」で144例中104例であり、「実質」で726例中497例であった。よって、先行要素存在率は「形式」で72.2%、「実質」で68.5%となり、「形式」で若干高い結果となった。

存在率では顕著な差異がみられないため、次に、どのような先行要素が用いられているのか、先行要素のバリエーションについて分析する。先行要素をもつ「形式」の談話の一部として、次の三例を挙げた（【 】内の「 」は作品名、数字以下は該当シーン番号、シーン名を表し、「ほめ」ことばはゴシック体にし、先行要素には該当部分の下に波線を付した）。

例1 【「大安に仏滅!？」33最上階・展望レストラン】

文子…松井と真弓の見合いの仲人。

文子「まあ、松井さん、本当にお偉いわ。ねえ、写真よりずっと美人でしょ?」

松井「え、ええ」

真弓「（文子に）松井さん、困ってらっしゃるじゃない」

松井「いや、ほんと、きれいで、正直、驚いてます」

例2 【「夏の庭」49河辺家】

河辺、受話器をつかむと諄に押しつける。

河辺「木山、おまえ電話しろ! こういうのはおまえが一番うまい!」

まず、先行要素の担い手に関してであるが、例1のように「ほめ」を受けた相手を主体にしたもの

と、例2のように「ほめ」の表現主体を主体にしたものが圧倒的に多い。

次に、具体的なバリエーションについてであるが、例1の「ほめ」に先行する流れとして、仲人（第三者）である文子が、真弓の容貌についての話題を真弓の見合い相手の松井にふったところ、松井は戸惑ってはっきりしない。真弓は松井を困らせるような、しかも自身についての話題が、結果的に場の雰囲気悪くしかねない、という状況を断ち切るために、「困ってらっしゃるじゃない」と文子に対して切り返す。この発言は、松井が「真弓は写真よりもずっと美人、というわけではない」と考えている可能性の存在を前提にしたもので、発言者である真弓自身にとって気分がいいものではない。つまり、この要素は「ネガティブ」な話題だ、と考えられる。

例2では、見知らぬ人物に電話をかけることに気乗りしない表現主体、河辺が、自分の代わりに相手である木山に押し付けようとしている。この「ほめ」の先行要素は、「依頼・要求」の例である。

例3 【「天上の青」23車の中】

（自殺しようとする瞳を偶然通りかかった富士男が声をかけて引き止め、二人は富士男の車に乗り込む）

富士男「（うんざりと）いいよ。そんな辛い話、無理に話す事もないよ。それよりさ……」

と、いきなり瞳の手を握る。巧みにシートを倒してのしかかる。

瞳 「（もがいて）あっ。何するんですか。キャッ」

富士男「このまま帰したら、君、また死にたくなるだろう。生きてる事の楽しさ、教えてやるよ」

瞳 「そんな、こんな所で……」

富士男「こんな所、誰も来ないさ」

瞳 「でも、私……」

富士男「（見つめ）目がきれいだね」

例3のシーンの直後、富士男は、そもそも声をかけた目的であった瞳との肉体関係をもつことを叶えると、瞳を殺してしまう。

この先行要素の担い手は、「ほめ」の相手である。「でも、私……」は、表現主体の要求を拒もうとする、表現主体にとってネガティブな話題、と考えられる。ただしこれは、表現主体側からすれば、一連の要求を行った後に「ほめ」る、という流れをとっており、この流れは、逆に、表現主体が「ほめ」に先行して要求を行う、といった大きな視点で捉えることもできるのである。

これまでの例にみられるように、「形式」の先行要素では、表現主体、相手、あるいはその両者や、第三者にとって好ましくない、ネガティブな話題や、「依頼・要求」をはじめとした「行動展開表現」（蒲谷・川口・坂本1998、以下「蒲谷他1998」とする）が複数例確認できた。そして、このようなマイナス要素の出現率は、「実質」と比較して20%近くも高い結果となった⁽⁶⁾。これは、直前にマイナス要素が存在すると、「形式」になりやすい、と捉えることもできる。逆に、人間関係や談話促進に

好影響を与えうるポジティブな話題や「ほめ」導入へのプラス要素については、「実質」の場合よりも、出現率が低かった（同様に、直前のプラス要素の存在によって「ほめ」が「実質」になりやすくなる、と考えられる）。

以上により、「ほめ」の直前にマイナス要素が存在すると、プラス要素の場合と比較して、「形式」になりやすい傾向がある、といえる。

例4 【「復活の朝」41同・看護部長室（翌日）】

ノックをして、新川が入ってくる。

新川「お呼びでしょうか」

松井房子看護部長が、軽く手招きする。歩み寄る新川。松井、その顔をじっと見る。

松井「顔色が悪いわね」

新川「……」

松井、あの睡眠薬を出して机の上に置き、

松井「ハルシオンは常用すると幻覚症状を起こすの、知ってるわね」

新川の表情が強張る。

松井「私は、睡眠薬をとること自体を否定してるんじゃないのよ。疲れて眠れない時にはむしろ薬を利用して、サッと眠った方が体にもいいわ。でも、限度があるのよ」

新川「……」

屈辱感がこみ上がってくる。

松井「しばらく休養をとりなさい」

新川「そんな必要ありません」

松井「病人に病人の看護ができると思ってるの?」

新川「……」

松井「私はあなたのことを心配しているのよ。あなたはベテランだし、優秀な看護婦だし、率先して若い人たちの模範にならなきゃいけない立場じゃないの。いらいらして患者さんや家族の方たちに当たったり、仲間から浮き上がるような行動をとられたら困るのよ」

次に、例4は「実質」の例である。ここでは、看護部長の松井が、後輩である新川の睡眠薬常用を指摘し、叱っている。ここで、表現主体は相手のためを思ったり改善を望んでいる一方で、相手の解釈や、その結果の機能はプラスにもマイナスにもなりうる。このような一連の、相手の解釈によって機能が変化する言語行動について、資料中では、「ハゲマシ」、「アドバイス」、「シカリ」、「タシナメ」が確認できた（「プラス要素」にも「マイナス要素」にも属さない「その他」として分類）。そして、その出現は、例4のような「実質」で21例だったのに対して、「形式」では1例と、「実質」が圧倒的に多かった。ちなみに、「形式」での「ハゲマシ」の例は、最下位で落選した相手に向かって、「定員十二人の十四番目ですからね。惜しかったですよ」というものであった。

3.2. 先行要素の連続

「ほめ」に先行する流れを調査するには、「ほめ」に先行する一要素のみならず、例3、例4でみられたように、さらに前の要素の連続にまで着目すべきである。そこで、直前の一要素のみならず、二要素以上連続したものについても、調査を行った。

「形式」では、先行要素がマイナス要素のうち、さらにその前にプラス要素が使われていた例（プラス要素→マイナス要素→「ほめ」）が、資料では見つからなかった。一方、「実質」では、同様の例が11例中8例存在した。次の例5は、マイナス要素（「依頼・要求」）をプラス要素（「ほめ」など）の前後に組み合わせ、要求をかなえていく例である。該当個所には後の説明のために番号を付した。

例5 【「眠れる美女」p73江口家・書斎】

江口…菊子の義理の父

江口、老眼鏡を掛けて、事典を引いている。

脇に能面がある。

江口、ひょいと振り向いてびっくり。

菊子が何時の間にか入って来て、後ろからじっと江口を見詰めていたのである。

江口「あ、起こしちゃったかな」

菊子「いいえ」

江口、事典を閉じて眼鏡を外し、

江口「これはね、室町時代のいわゆる古作には入らないんだけど、それに次ぐ名人の作品らしいんだ。偽物じゃなければね」

と、改めて、面を見詰めるが、思いついて、

江口「あ、そうだ。ちょっとつけてみてくんないかな」(1)

と、面を差し出す。

菊子「はい」

菊子、江口から面を受け取って顔に嵌める。

江口「……顔に付けると生きて来るねー」(2)

菊子の目、じっと江口に注がれる。

江口「もう少し後ろ下がってみて……、そうそう……いいな」(3)

菊子、後退りして、江口をみる。

江口「俯くと、悲哀感が出るということらしいんだが」(4)

菊子、そうっと前に体を折る。

江口「うまい、うまい、まさか能に詳しいんじゃないだろうね」(5)

菊子「……」

俯いた姿勢のまま、顔を左右に振る。

江口「ああ、まるで、生きた少年だ」（6）

江口、魅入られたように立ち上がり、菊子の前に立つ。

と、面の下からずっと一条の涙が流れる。

菊子「……お父様、ずっとこのままこの家において下さい」

江口「菊子……」

江口、菊子の側に寄る。

江口「何言ってるんだ。ここが菊子の家じゃないか」

江口、能面を菊子から取りテーブルの上に置く。凄い勢いで菊子が抱きつく。

まず、（1）は、後の「ほめ」の送り手、つまり表現主体による、最初の要求（マイナス要素）となっている。その、先行要素における要求が相手によってかなえられると、（2）では（1）に関連した「ほめ」を続ける。しかし、（2）の「ほめ」は、（1）の「ほめ固め」（大野2002a）であると同時に、次の（3）の要求（FTA⁽⁷⁾）に対するやわらげとなっている。そして、（2）の「ほめ」が受け入れられると、（2）とは別の表現による、いいかえの「ほめ」（3）で応えている。ただし、この「ほめ」は、表現「形式」の違いだけでなく、「自己表出表現」（蒲谷他1998）的かつ相づち的であり、伝え方や機能を転換させる工夫によって、前後のほめの機能を強化する結果となり、三番目の要求（4）も受け入れられている。そして、（3）でのあいづち的な、いわば軽い「ほめ」から一転、くりかえしによる「ほめ」や、相手への質問による「ほめ固め」で「ほめ」の強調をし（5）、これらによって気分をよくした相手が、自主的に、表現主体による無言の要求（能面をつけたまま、顔を左右に振って、まるで面の少年のように演じること）を叶えている。その要求の受け入れに対する「ほめ」として、再び、「自己表出表現」的で、比喩を用いた「ほめ」の強化をおこなっている（6）。

例5の流れを図であらわすと、次頁のようになる。表現主体は「ほめ」の強さや、方法のバリエーションの変化といった工夫をしつつ、「ほめ」を相互に強化し、連続する要求（FTA）を巧みに、また効率的にかなえているといえる。

このように、先行要素が複数ある場合、それらの要素にまで着目すると、別の見方ができる（表2参照）。すなわち、「実質」ほめの先行要素として、プラス要素25例、マイナス要素11例、その他の要素9例として扱ったものが、「プラス要素を含むもの」（第一、第二⁽⁸⁾が「+、+」、「+、-」、「+、他」、「-、+」）として数えると、45例中39例（86.7%）あると捉えることができるのである。一方、「形式」ほめでは同様の例が11例中6例（54.5%）であり、数字上からも、「実質」では高い割合で「ほめ」導入への過程が踏まれている、とみることができる。

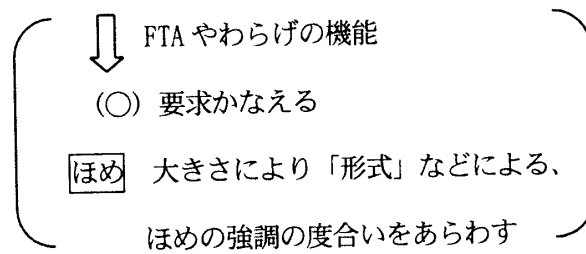
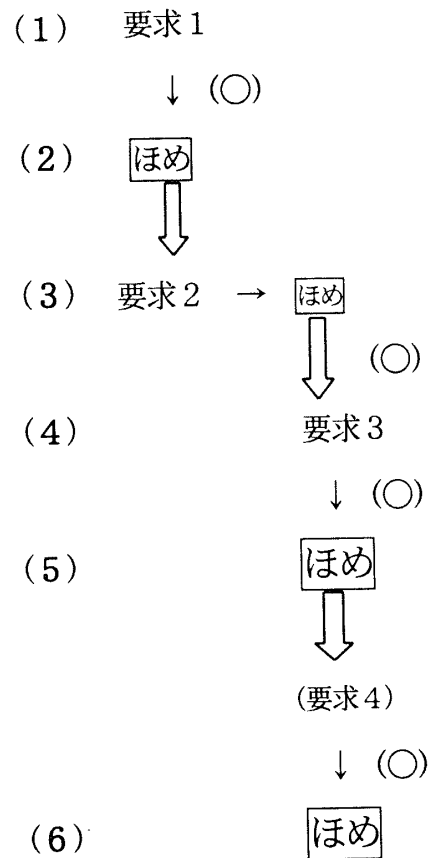


図1. 例5の流れ

表2. 「実質」・「形式」と先行要素の連続

	第一要素	+			-			その他	計
	第二要素	+	-	他	+	-	他		
	「実質」	13	8	6	12	3	2	1	45
	「形式」	3	-	-	3	2	3	-	11
	計	16	8	6	15	5	5	1	56

4. 考察と課題

以上により、「形式」での先行要素の特徴を、次のようにまとめることができる。

まず第一に、「実質」の場合よりも、直前にマイナス機能の要素が多くあらわれ、依頼や要求といった、行動展開表現によるF T Aの割合も高い。

第二に、ほめ導入のためのプラスの要素は少ない傾向にある。

第三に、相手のためを思う言語行動と考えられる、「ハゲマシ」、「アドバイス」、「シカリ」、「タシナメ」が、「実質」の場合と比較して少ない。これは、プラスでもマイナスでもない「ハゲマシ」や「アドバイス」に、相手の改善を願う、という前提があるだけに、たとえその相手が「ほめ」によってどのような印象を抱こうが、「実質」として捉えられる可能性が高いためではないか、と考えられる。

さらに、先行要素の連続に着目すると、第四の特徴として、プラス要素をF T Aなどマイナス要素に組み込んでその機能を有効に用いることが「実質」と比べて少ない、という点を指摘できる。

以上により、元来「ほめ」は、それ自体が主に **positive politeness** としての機能を持ち、小稿でのプラス要素にあたるものであるが、「ほめ」直前にマイナス要素が存在してしまうと、そのプラス機能までも形式的だ、という印象を与える可能性が高くなるといえる。ただし、直前にマイナス要素があっても、「ほめ」に至るまでの過程においてプラス要素を組み込んでいけば、例5での「依頼・要求」が叶えられたように、マイナスの「形式」的な印象から、「実質」の印象を与えやすくなるのではないだろうか。

小稿における問題点としては、第一に「実質」、「形式」の分類の問題が挙げられる。「実質」、「形式」という枠組みを、表現主体の意図とは別に、相手に与える印象から判断するもの、と捉えればすべての「ほめ」から受ける印象を分析するのは有意義であろうが、今後は本発表での結果を利用した上で、複数の被験者の印象をもとに分析したい。二点目として、条件の絞り込みによる用例数の少なさが挙げられる。範囲を広げて調査する必要がある。

今後は、待遇表現としての「ほめ」における「実質」、「形式」の別のみならず、「形式」として解釈された「ほめ」の印象等についても客観調査等を通じて分析したい、と考える。

付記 小稿は、第11回社会言語科学会研究大会（於立教大学）における発表原稿を、西村美和先生はじめ多くの方からいただいたご助言により、加筆修正したものです。ここに記し、心より感謝申し上げます。

- 注(1) ここでは「ほめ」を、「相手自身、あるいは相手に関連する「よい」と認めうるものごとについて、明示的あるいは暗示的に肯定評価を与えることによって、相手への好感情を表す言語行動」とする。
- (2) 「ほめ」の内容や方法、応答、前後の要素などは、人間関係や場によって異なる傾向がある。
- (3) 表現主体の意図についての帰納的分析は不可能であろうと考えるため。殊にシナリオにおいては、作家、役者、鑑賞者（視聴者）の想定するものが一致するとも限らない。そこで、小稿では、表現主体の意図からアプローチするのではなく、相手の印象を調査することによって「形式」らしさの特徴を分析することとした。
- (4) 次に挙げる三種のシナリオ集より、時代劇など舞台が現代でない作品、特定地域の方言色が強い作品（東京語を除く）、脚本家の母語が日本語ではない作品を除いた、101作品、104話（テレビドラマ「天上の青」は全四話）を対象とし、計870件の「ほめ」を抽出した。
『年鑑代表シナリオ集』（シナリオ作家協会、'93～'00）
『月刊 シナリオ』（シナリオ作家協会、'93～'00）
『テレビドラマ代表作選集』（日本脚本家連盟、'91～'98）
シナリオ使用の利点や問題点、さらにテレビドラマと映画のシナリオを併用した理由については大野（2002a, 2002b, 2003a, 2003b）で詳述している。
- (5) 典型的な「形式」の特徴を分析するため、判断しかねる用例については「実質」の性質も有するものとして、小稿では「実質」グループに入れて扱った。
- (6) 「実質」、「形式」それぞれの先行要素の種類と数の比率は、表1のようであった。
「その他」…ハゲマシ、アドバイス、シカリ、タシナメなど
マイナス要素において、「依頼・要求（・勧誘）」が全体に占める割合は、「実質」ほめで2.4%（12例）、「形式」ほめで7.7%（8例）だった。
- (7) Face Threatening Acts（面目を脅かす行為）の略。
- (8) ここでの調査対象は、「ほめ」に先行する要素の連続であるため、表1で分類した「ほめ」の先行要素は、表2の第二要素にあたる。

表1. 「実質」・「形式」と先行要素

	要素の種類	計	
		小計	合計
「実質」	+要素	290 (58.4%)	497 (100%)
	-要素	148 (29.8%)	
	その他	59 (11.9%)	
「形式」	+要素	44 (42.3%)	104 (100%)
	-要素	50 (48.1%)	
	その他	10 (9.6%)	

参考文献

- 川口義一・蒲谷宏・坂本恵（1996）「待遇表現としてのほめ」『日本語学』15-5 明治書院
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵（1998）『敬語表現』大修館書店
- 熊取谷哲夫（1989）「日本語における誉めの表現「形式」と談話構造」『言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究（2）』広島大学教育学部日本語教育学科
- 大野敬代（2002a）「politeness ストラテジーとしての「ほめ」とその後続要素について」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』9-2
- 大野敬代（2002b）「談話中の位置，面識状況からみたほめの特徴—シナリオにおける談話分析より—」『日本語論叢』第3号 日本語論叢の会
- 大野敬代（2003a）「人間関係からみた「ほめ」とその工夫について—シナリオにおける「働きかけ表現」として—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』10-2
- 大野敬代（2003b）「シナリオ談話における「形式ほめ」の特徴」『日本語論叢』第4号 日本語論叢の会